創立百十周年　決起の集い

笠岡大教会 創立百十周年 三年千日活動も 間もなく二年目を終えようとしています。

この二年間の活動にけじめをつけ、いよいよ迎える仕上げの年を一層意義あらしめて……

笠岡大教会が 明治二十四年十月 この笠岡の地に設立されて、来年 百十年を迎えます。

初代会長 上原さと様の 教祖を仰ぎひたすらな親孝心一条の心が、私たちの親・祖父母・先人達の心を動かし、真実の小川となり 今 百十年を経て 笠岡の地の救け一条の大河となりました。

私達の世界たすけの信仰は 教祖に教えられたおつとめを芯としています。

笠岡の理に繋がる皆さん、一年後の来年 十一月二十九日の創立百十周年記念祭を目指して、来月十一月二十一日総立ちのてをどりまなびで 決起の心を大教会に結集しましょう。

プログラム

8：30		一鼓
9：00	開扉・献饌	二鼓
9：30	おつとめ	三鼓
11：30	大教会長様挨拶	
12：00	高杉 治夫 先生 講話	
13：00	てをどりまなび	
14：00	昼　食	
14：15	天中軒 鵬さんの 歌謡ショー	
15：00	終　了	

おつとめの扇（1対）をご持参下さい。

かさおか

発行所
天理教笠岡大教会
かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66−1311

笠岡大教会
創立110周年

三年千日スローガン
諭達を実践し、をやの理を戴こう

本年の実践項目
つとめに専心
百万軒にをいがけ
全教会で陽気ぐらし講座開催

しみじみと味わう陽気ぐらしの境地へ

海外伝道推進講話　永尾一夫先生

海外伝道部（田中一之部長）では、去る9月21日、永尾一夫先生（本部布教部長・元ハワイ伝道庁長）をお招きし、大教会9月月次祭に引き続き祭典講話に代えて、海外伝道推進講話を頂戴しました。

永尾先生は、海外滞在中の経験を通して感じられたことや、ご自身の人生を通して培った成人の歩みなどを赤裸々かつ熱烈にお話し下さり、参拝した人々は、目頭を熱くしながら熱心に耳を傾け、海外伝道における諸問題を自らの問題に置き換えて、にをいがけ・おたすけの原点を見つめ直しました。

諭達の要点

昨年は、諭達の思召を全教に徹底しました。今は、それを受け、諭達の精神を胸に体して、それぞれに一生懸命働くときです。

今回の諭達を拝読して、私は、強く胸に迫ってくる点が四つ程あります。

第一は、今、世の中が、未曾有の大転機を迎えているということです。諭達に「生命の母体である自然環境をも危うくして、人類の未来を閉ざしかねない。」と具体的に指摘される環境問題、或いは「親子の絆の弱まりは社会の基盤を揺るがしています。まさに今日ほど、世界が確かな拠り所を必要としている時はない。」と指摘される家庭問題・教育問題、全てが、今、生きている私達一人ひとりの足下の問題です。

「人は人、自分は自分」という生き方は、もう通用しない時代になってきました。今迄、そういう生き方を長年積み重ねてきたその付けが、今、生きている一人ひとりの足下の問題として差し迫っている、そういう時代です。

世の状をしっかりと直視して、一人ひとりが、教祖の教えに照らして、自らの生き方・人生観・自然観などを改めていかなければならない時代を迎えています。

そうしたときに、この道の上にも大きな転機を求められています。

真柱の理を御健在な内に継承されましたが、これは、教祖御誕生二百年という黙っていても到来する旬と、前真柱様の御決断・現真柱様の並々ならぬ御決意を以て自ら生み出された旬とを重ね合わせられ、世の中が大転機を迎えている今、この道に生きている一人ひとりの上にも一大転機を求められたものです。

第二は、そのために、私達の信仰している教えの素晴らしさ、この世を治める真実の道だという確信を、一人ひとりが再確認させてもらおうということです。

諭達の中に一番たくさん出てくる言葉は「世界たすけ」という言葉で、十三回出て来ます。

第三は、一人ひとりの「よふぼく」に語り掛けられたということです。

「よふぼく」以外の言葉では、「この道を信じる者」、「道の子一同」という表現がそれぞれ一回ずつで、後は「よふぼく」に語り掛けておられます。

何故、そういう諭達になったのかということについては、諭達を発布された翌年の年頭の御挨拶で、

前真柱様が言い続けられた「教会内容の充実」とは、建物がごついことでも敷地の広いことでもありません。一つひとつの教会が、土地処の陽気ぐらしのひながたとして、そこへ行けば、そういう雰囲気が正にある、それが、教会内容の充実という上で一番大事なことで、そのためには、その教会に関わる一人ひとりの心の有り

様、日々の有り様、これが一番大事だと思う上から、こういう諭達になりました。

と仰っています。だから、よふぼく一人ひとりに語り掛けられたのです。

第四は、「ああせこうせ」と高い処から呼び掛けられたのではなく、諭達の冒頭で「一層の進展と充実を期して勤め切る決意を共にしたい。」と語り掛けられたということです。

そういう立場で産まれ、そういう立場で育った、その時が来たから理を受け継ぐというだけではなく、世の中や道の厳しい現状、何もかも承知の上で、一層の進展と充実を期してつとめ切る、その決意を、先ずは、真柱様御自身が親神様・教祖に固く誓われた上で、「共にしたい」と語り掛けられました。

この四点が、私が諭達を拝して、非常に強く胸に迫ってくるところです。

先ずは、よふぼくとして

本部で御用をつとめる者も、教会長も、立っているところは、先ずは、よふぼくであり、その上に、立場に相応しい責務があります。よふぼくとして先ず横一線に並び、しっかりと働こう、これが今日の時旬です。

『おかきさげ』に、

人を救ける心は真の誠一つの理で、救ける理が救かるという。よく聞き取れ。

とあり、『おふでさき』には、

わかるよふむねのうちよりしやんせよ
人たすけたらわがみたすかる　（三号47）

とお詠み下さいます。

何故、人をたすけたら我が身がたすかるのか。仰る通り素直に通ったご褒美として我が身にも結構をお見せ下さる、結果的にはそうかも知れませんが、「思案せよ」との仰せなので、今日は、私なりの思案を聞いて頂きたいと思います。

▼心の入れ替え

私は、六人兄弟の一番上、入信五代目。代々、養子・子無しの家で、私が、入信以来、始めて永尾家で産まれた男子という中で産まれたので廻りの非常に大きな期待の中で育ちました。

小さい頃は、真面目に道を継がなければと、自ら信仰を求め、神様を探しましたが、その探し方が、自分の物差しで取捨選択し、御教理をしっかり求めていこうとはしませんでした。

自分の心の中に理の世界が開けず、その内、心が横道へと動きました。

男兄弟五人なので家の後は誰かが継ぐだろうと、大学四年生の時、仕事が内定して、両親を前にして、やりたい事があると言いました。

黙って聞いていた親は、最後に一言、「お前はいんねんあって永尾の長男に産まれてきた。替わりはない。」と言って、席を立ちました。部屋を出て行くその後ろ姿に、小さい頃から眺めてきた、一生懸命お道を通っている親の姿が重なり、千金の重みで胸に迫り、思いが変わりました。

親が、修養科へ行けと言えば修養科へ、そして検定講習へ、本部の青年に入りました。単純作業の繰り返しで、大学までででたのにと思い、心が迷いました。そういうときには「聞いて成程は他人の理、通って成程が我がの理。信仰はそういうものだ。だから、今はものは試しに通っているんだ」と自分に言い聞かせました。

親の言うこと聞いて親里へ帰り、曲がりなりにも通っていたからか、神様は、そんな私にも転機を与えて下さり、一年経たぬ間に首根っ子を掴んで下さいました。

▼お与え頂いた節

教祖殿の結界に頭が当たる程前に参じ、教祖の肌のぬくもりそのままに、今、抱き抱えられているという実感で、喜びで涙が止まらず、頭が上げられなくなり、初めて、自分の心で、足で、この道を通るようになりました。

人に後ろ指を指されるようなことは何もしていない、人と同じように真面目に本部青年としてつとめているつもりでしたが、一番出来の良い大学生の弟が精神病にかかりました。

それからの日々は大変なもので、年老いた両親・私の四人の子供、見境なく暴れ、居合わせた男兄

弟が泣きながら押さえ付け、憩の家から往診してもらい麻酔を打って、隣町の檻付の精神病院へ連れて行く。そういう日が幾度となくありました。

ところが、祖父は、「この子が病んでいるのではない。我が家のいんねんの台として、一人で苦しんでくれているのだ。家族一緒に通らなければ、どこにいんねんの理が果たせるか。」と申して、また、病院から連れて帰ってくるのです。

心遣い・癖性分が凝り固まっていんねんの理として現われてくる、病気を通して、まざまざとそれが解ります。理屈の通る世界ではない、おさづけをお取り次ぎすれば直ぐによくなるという病気ではないので、家族は必死に神様に縋って通りました。

ふと、気が付けば「ああ、ここまでたすけて頂いた」と自らに言い聞かせて、また通る。もう少しもう少しと見れば、また、暴れる。そして、最初から、或いは、もっと悪い状態からの通り直し。飽くことなくそれを繰り返しました。

正に「我が身思案」の積もり重なった姿が見えてくる。自分のことばかり言い募って暴れる。

今日は少し機嫌がよいと思えば、ちょっとでも分かってくれればと思い、「昔のことを思ってみよ、ここまでたすけて頂いて有難い。これからも、低い心で通ろう。何からでもひのきしんしよう。」と話しました。

妄想や幻覚にさいなまれつつも、自分の考えを持っているので、本人は、聞いているようでも心の中に何も染み込まない。周りの人の心は分からないのです。

たった一人の末の妹の結婚式の日、教祖殿で式を挙げ、正に出発しようとしている妹に殴りかかる、「妹に比べてこの俺は」という気持ちからか、我が身思案に凝り固まった姿だと、何とも遣る瀬ない思いでした。

▼いんねんの自覚

そこまでは分かっても、祖父の言う「この子が病んでいるのではない。」という意味がなかなか分かりませんでしたが、こうして繰り返していく内に、やっと自分の心を見た感じがしました。

兄弟は他人の始まり。必死で神様に縋って通っていたはずが、心の片隅に「こいつのお陰で、和やかな家が無茶苦茶になった。睦まじい家族がバラバラになった。」という思いがへばりついて離れなかったのです。

病院に入れているときが、本当に心が安らぐ。「ちゃんとした精神病院に入れているんだから、暫く入れておけばよいのに、何故、連れて帰るんだ。」という自分の心の酷さ・冷たさ、それに気が付いたとき、通り来たそれまでの自分の心の道を振り返って、そこに、しみじみとした懺悔の道がありました。

たすけの本元であるおぢばで、教祖のお膝元の御用にお遣い頂きながら、真面目にやっているつもりでしたが、肝腎のおたすけの心が籠もっていませんでした。

見るもいんねん、聞くもいんねん。自分のいんねんだと悟りが付いて振り返ってみると、あのとき神様はこうも知らせて下さっていた、ああも知らせて下さっていたのにということがたくさんありました。

当番のとき、何故か同じ身上の人によく行き会いました。その時、おさづけをしたか、お話しを聞いて上げたか、「おーい、境内掛さん、この人、おかしいから連れて行け」とやっていたではないか。

同じ身上で苦しんでおられるご家族が身近にいくつもあった。おたすけに行ったか。通り一遍の電話をしただけではないか。

あのときこうも知らせて下さっていたのにと、我が身にとことん痛さを伴なうまで我がいんねんとして悟れませんでした。

先祖代々の伏せ込みのお陰で、今、結構にお連れ通り頂きながら、自分の代になって、自分の兄弟に見せられた理に、やっと自分のいんねんだと悟られたのです。

それまでは、弟の身上に振り回され、悪いときは一緒に落ち込む、年寄りや女子供の手に負えないので、時間があればなるべく家に居るという具合で、時旬の理も御用も関係なく、少しも前向きになれませんでした。

自分のいんねんだと悟られたときに、初めて腹が据わり、一生このままで結構、こいつと一緒に

通ろう、それが自分のいんねん納消の道だと思え、やっと前向きに積極的にお道の御用の上に心を定めることができました。

丁度、教祖九十年祭活動のさ中。家族で談じ合い、それぞれが時旬の上にしっかり心を定め、脇目も振らず身上にとらわれず必死で通る日々を迎えました。

▼出直し

九十年祭が終わり、気が付けば一つの不思議を見せて頂きました。暴れなくなったのです。憩の家に通い薬をのみながらでしたが、十七年という長い年限で大勢の本部の先生にも理解され、そういう方の部署で加減の良いときはひのきしんをするという日々を迎えました。

兄として「こいつの人生はこれからだ。何とか、この道の上で生涯が生かされるように。できれば、配偶者も」と思った矢先に吐血しました。

十七年間、薬を飲み続け、消化器系統がやられて吐血が頻々と起こり、入院。私か私の息子が、夜だけ交替で付き添いました。

余り話をせずに早く寝た方が身体にもよいと思い、先に寝た振りをして様子を伺っていましたが、ある晩のこと、様子がおかしいと思って声を掛けると意識がなく、動脈が切れて内臓大出血。医者が駆け付け、家族が駆け付ける中に、三十分程で出直しました。

通った年限が年限だけに、こいつの人生はこれからと思った矢先の出来事で、悔しくて残念でした。

遺品を整理すると日記が出てきました。心を病んだ弟の心の軌跡を食い入るように読みました。出直す前の日の日記に、虫の知らせか、真柱様・奥様に対するお礼が書いてありました。

病んでいる最中、一人だけ起き出し、夜更けに真柱様のお宅へ行く。それでも会って下さって、訳の分からぬことを色々と聞いて下さり、諭して下さった日もあり、具体的にも数々の親心を頂いた。そんなことは本人には何も解らないと思っていました。それが、先ず、真柱様・奥様に対するお礼が書いてありました。

次に、お世話になった先生方、何もかも承知の上で抱えて、ひのきしんに連れ通って下さった先生方に対するお礼。最後に、「家族のみなさん。長年、本当にお世話になりまして、ありがとう。」と書いてありました。

それを読んで、私は、出直の悲しさの中にも、残念・悔しさが絶ち切れ、「心をここまでたすけて頂いた」そう思わずにはおられませんでした。

あれ程我が身のことばかり言い続けて暴れた弟の心の中を長年見続けてきましたが、周りの全ての人にお礼を言う心にまでたすけて頂いて、身は何の苦しみもなくアッという間に出直しました。

私は、「新たに生を享けたら、たすけて頂いたこの心で、一生懸命、この道を通ってくれる」そう自分の心に言い聞かせ、初めて弟の霊に手を合わせてお礼を言いました。我が家のいんねんを切り替える台となって、尊い短い三十六才の一生を終えてくれた弟の霊に。

▼いんねんなら……

「いんねんなら通らにゃならん。通って果たさにゃならん。」という御言葉。ちょっと聞けば「自分が、通った道なら通り返せ、蒔いた種は刈り取れ」と突き放しておられるような冷たい響きがありますが、私は、この御言葉の温かさに泣きました。

教祖は、人のほこりはよく見えるが自分のほこりはなかなか見えないと仰る。皆、「あの人はこうだああだ」と陰口はよく言うが、その実、自分の心の奥をどれだけ自覚しているのか、なかなか分かり難いものだと仰る。気が付かないと凝り固まるから、いんねんの自覚の上から「通らにゃならん、果たさんやならん」と仰った。それが分かりました。

思うようにならぬのが、いんねんの理の現われてきた姿。なってきた姿を自分のいんねんとして悟れると「思い切りがいんねん切る」で、心の向きを鮮やかに変えられる。後は、「三分の心、七分の台」と仰る。三つ通ったら、後の七つは神様が足してでも運命を切り替えて下さるのです。

天理教の「いんねん」の教理は、漢字ではなくひらがなで書いて、仏教的な因縁とはっきり区別しています。飽くまでも、いんねんの自覚・運命の切り替えの上から仰る温かい言葉だと思います。

▼親の背中

私の子供はそういう中で育ちましたが、子供達が人生の岐路に立ったとき、相談にのってやった覚えはありません。道の上でも、何も仕込んでいませんでした。むしろ、こんな中で育ってどんな子になるだろうか、まともに育つだろうかと懸念した日もありましたが、子供をガードすることに心を砕きました。

しかし、その中で、皆お道大好き人間になってくれて、本当に勿体ないことだと思います。神様が育てて下さったのです。

多分、どんな中も信念を貫いて微動だにしなかった自分達の祖父母を、その祖父母の信念に引っ張られて如何にも人間的に揺れ動きながらではあったが、必死に通った私たち夫婦の姿を見ていてくれたのでしょう。そして、自分達の心にお道の素晴らしさを掴んでくれました。神様に育ててもらったと、私は、今、しみじみ思います。

ハワイ伝道庁にいた十年間は、私たち夫婦はハワイ、長男は百十年祭に向けて大阪で布教、長女は縁あってブラジルの教会に嫁し、次男はロサンゼルス伝道庁で青年つとめ、次女は川崎に嫁して夫婦で布教中、そういう中で、滅多に会えない。子供達の結婚式に兄弟・夫婦が揃ったことがない。しかし、そうした中で「神様が、皆、同じ心で同じ道をお連れ通り下さっている」という何とも言えない安心感、その幸せを私は味わって通りました。

この日を迎えられたのも、弟の尊い生涯あればこそだと思います。

をやの想いと よふぼくの使命

▼神の前には欲はない

「一代という一つの理、二代、一つ一つの理、段々深き心」と仰いますが、信仰とは、単なる年限ではなく、たすけ一条の年限が大切だと思います。

『みかぐらうた』に、

よくのないものなけれども
かみのまへにハよくはない　（五下り目４）
よくにきりないどろみづや
こゝろすみきれごくらくや　（十下り目４）

欲のない者はない。しかも欲望に切りはない。放っておいたら、誰でもそうです。突き詰めて考えたら、誰でも自分が大事です。どこまで行っても満足ということがありません。「自分は何も悪いことをしていない、人に迷惑を掛けていない、自分の甲斐性で一生懸命働いて、しっかり稼いで、暮らし向きを豊かにして、家族を幸せにしていく、それでいいではないか」皆、そう思うでしょう。

しかし、殆どの人がそう思って今日まで生きてきて、今の世の状、このままいけばどうなるのかという時を迎えています。

私の幼年時は、喰うに喰えない、喰える物は何でも食べた戦中戦後、母が、道や庭を潰し、空いている所に作物を植えて、一生懸命、子供に喰わす物を作り、必死でした。

今は、飽食の時代。天理教の布教師でも野垂れ死ぬ人はいません。天理駅の路上生活者も丸々と肥えています。

陽気ぐらしを望まれる親神様・教祖の目からご覧になって、果たして、どちらが思召しに近い生き様なのかと考えざるを得ません。

また、アメリカで過ごした十年間、麻薬・癌・エイズなどの様々な社会問題を全く身近に感じました。このような、人類の将来に関わる様々の社会問題・思想問題・環境問題などの将来を憂うべき姿が顕著に現われているのは、むしろ、日本やアメリカなどの、物の豊かさを求めて生きてきた先進国の姿です。それは、人間の生き様として切実に問い直されている姿で、正に親神様の御意見、警鐘だと申さざるを得ません。

お道を信ずる私達自信が、欲のない者はない、欲に切りないと聞いていながら、ともすれば、ついつい、世の動きに流されて生きてしまいます。そういう生き方を積み重ねていけば、年限と共に、いんねんの理として、個人の上にも、社会の上にも現われてきます。

自分の体験から、そのことを強く懺悔し、流されやすい自分の甘さを常に戒めながら通っている日々です。

▼欲を忘れてひのきしん

「慎みとたすけ合いの精神を広めて、世の立て替えを図るべき時である。」これは、諭達の大事なキーワードだと思います。

八つのほこりの意味は、一言で言えば、みな、我が身可愛い欲です。しかし、自分のほこりは見えない、なかなか気が付かないから、気が付きやすいように説き分けておられます。八つのほこりは、「これもせぬよう、あれもせぬよう」と思えば神様の思いと逆になります。これは戒律ではなくて、気が付きやすいようにと説き分けているので、気が付けば払えばよいのです。

欲に切りないので、我が心の点検を常にしなければなりませんが、それだけでは心は晴れないと思います。

御利益信心はその場限りで、反省せねば、懺悔せねばという内省的な信仰だけでは、心の中に「代々信仰したお陰でたすけて頂いているのだな。結構にお連れ通り頂いているのだな。」というしみじみとした信仰の喜び・勇み心は、決して生まれてこないと思います。

そこのところを教祖は、「欲のない者はない。欲に切りない泥水。」であるが、「神の前には欲はない。心澄み切れ極楽や。」と仰います。『みかぐらうた』に

よくをわすれてひのきしん
これがだいゝちこえとなる　（十二下り目4）

陽気ぐらしの肥やし・たすけ一条の肥やしになると詠われたのだと思います。

ひのきしんというのは、神様の御守護の中で生かされているという真実に、先ず、しっかりと目を向け、その喜びの心を神様にもっていくのでしょうが、教祖は、直々にたすけられた初期の信者さんに誠に端的に分かりやすく、どうお礼をしたらよいのか教えられました。

「人さんたすけなさい。自分がたすかったことを人さんに聞いてもらったらよいのや。」、「やさしい心になりなされや。癖性分取りなされや。人さんたすけなされや。」と諭されたのです。

放っておいたら、いんねんのしがらみに足を取られていく外はない人生の歯車を逆回転させる、そのキーポイントが、私はひのきしんだろうと思います。

大事なことは、たとえ小さなことからでもひのきしんをする、日々に積み重ねていく、そういう信仰姿勢の問題だと思います。そこに心があるときには、自分の欲望を忘れている。日々に心の癖付けをすることが肝腎で、自ずと欲を忘れた姿に繋がっていくのです。

そういう生き方が身に付けば「これも結構、あれも結構」と喜べる心になり、陽気ぐらしが味わえる、銘々の心の理作りができてくるのだと思います。いくら豊かで恵まれていても、それがなかったら陽気ぐらしは味わえないということになりかねないと思います。

▼自らの陽気ぐらしへの道……おさづけの理の取次

教祖が現身をお隠しになられた直後の『おさしづ』には

をやの命を二十五年先の命を縮めて、今からたすけするのやで。しっかり見て居よ。今までとこれから先としっかり見て居よ。……これまで、子供にやりたいものもあった。なれども、ようやらなんだ。又々これから先だんくに理が渡そう。よう聞いて置け。

と、また『おかきさげ』には、

人を救ける心は真の誠一つの理で、救ける理が救かるという。よく聞き取れ。……これまで運ぶ尽す一つの理は、内々事情の理、めんくに事情の理に治め。……これが第一。二つ一つが天の理と諭し置こう。さあ、これより先永く変わらん事情に。

と、おさづけの理をお渡し下さる教祖のお心を述べられています。「よふぼく自信が、人だすけの行ないの中で自らの誠の心を磨けば、陽気ぐらしを味わう心の理作りができる。これからおさづけの理を渡すから、しっかり人をたすける心になって、自分自身が陽気ぐらしへとたすかる足取りを積極的に進めなさい。たすけ一条に尽くす理・運ぶ理は、みな受け取るが、人のためにではなく、自分の陽気ぐらしへの道筋として通るのだと悟れ。」こういうことだと思います。

▼よふぼくの試金石……真剣なるおつとめ

こうして、一人ひとりの通り方・真実を一手一つに結んで、世界一れつをたすけたいというをやの御心一つに溶け込んで、身上たすけのみならず世の治まりも含めた神様の遍き御守護を祈念するのがおつとめです。

私は、青年会の頃、一ヶ月間のインド研修に行きました。バングラディシュが独立をしようかという内乱の真っ只中の異文化の中、世界の底辺といわれた貧困の中に身を置き、一れつ兄弟の自覚に立って、にをいがけ・おたすけをし、自分の信仰を見つめ直し、掘り下げてくるという地道な研修会でした。

至る所に路上生活者が居る、見渡せば死体がゴロゴロしている、一週間に一回、トラックで死体を集めて回り、川へ流す。そういう中に放り込まれて思考能力が麻痺し、着いて一週間程で難民キャンプへ行きました。

見渡す限りの地平線、三十万人収容といわれるくらいの見渡す限りの竹囲いの掘っ建て小屋。栄養失調でガリガリ、コレラが蔓延している。動ける者は軍事教練、動けない年寄りや病人は、広場でリーダーの演説を聞いている、その声をスピーカーでキャンプ中に流している。五感に訴えるものが、日本では想像も付かない悲惨な姿で、三十万人という圧倒的な量感を以って覆い被さったときに、私は完全に打ちのめされ、気負いを微塵に砕かれました。この中で、何ができるのか。今迄何をしてきたのか。

他の人は知りませんが、私は情けないことに、一言のお話しもできず、一人にもおさづけを取り次げず、すごすごと宿所に帰りました。その晩は、まんじりともせず、まだ一週間しか経っていないのに逃げ出したくなりました。

この悲惨な状況の中で、気負い込んで来た分、打ちのめされた自分、それを取り直せたのはおつとめでした。それまでは、よろづたすけのおつとめと聞いていたのに何も腹に治まっていませんでした。

夜が白み、朝つとめをつとめていると背筋に電気が走りました。同じ人間として、同じ親神様の子として生まれた兄弟があんなに悲惨な生活をしている、せめて、今日から一生懸命、気持ちを込めておつとめをしよう、町に出て一人でもよいからおさづけを取り次がせてもらおう、そういう気持ちに立ち直れたのです。

一ヶ月が終わって、出発の日にインドパキスタン戦争が開戦し、空港閉鎖、帰れなくなりました。

それから金も底をつき、食料にも事欠くようになりましたが、段々と、貧しい人たちが、私達にバナナなどを差し入れてくれるようにました。皆揃って、朝夕のおつとめをしていると、居合わせたインドの人達が、見様見真似で一緒におつとめをしてくれるようになりました。

この感動は、お分かり頂けるでしょうか。

ここから、逃げ出して帰りたい、そんな気持ちはどこかにいってしまっていました。

やっとのことで、二週間程遅れて帰国し、真夜中に東京に着きました。出迎えた同僚から「連絡も取れないので心配した。関係者一同でお願いつとめをしたが、毎日、青年会長様（前真柱様）が芯をしてくださった。」と聞いて、居ても立ってもいられなくなり、その晩は羽田に泊まらず、真っ直ぐおぢばに帰り、感激の朝つとめをつとめました。

おつとめが終わり、お玄関へご挨拶に行き、出てこられた真柱様に、お詫びとお礼を申し上げると、「私はなぁ、君らだけが無事で帰って来てくれたらよいというような勝手なお願いは、ようしなかった。」と仰いました。それを聞いた研修隊員は大泣きをしました。

曲がりなりにも、このをやと同じ気持ちで、あのインドの空の下で、インドの人達と一緒に朝夕のおつとめをしていたという感激の涙でした。

おつとめは、単なる宗教儀式ではありません。人間創造の元なるぢば・かんろだいを囲んで、創造の守護をそのまま手振りに現わして一手一つにつとめ、未来永劫の変わらぬ守護を願ってつとめるものです。

教祖百年祭の前に、神殿の上段を改修され、前で参拝すれば、かぐらつとめを拝せるようになりました。そういうふうに上段改修をなされた親心

のありがたさを、私は、海外の教会長としてつとめた十年の間にしみじみと実感しました。

私は、五十才にもなって海外に出て、言葉が不自由で、思うようにものごとが捗らない。そのもどかしさの中で縋るべきものはよふぼくとして与えて頂いた理、おさづけの理、日々月々のおつとめ・お願いつとめに瞼を閉じれば眼前に浮かんでくるぢば・かんろだい・かぐらづとめ、海外の教会長として、ありがたさを実感しました。

あの広い参拝場、どこで拝んでも一緒だと思っていました。海外でつとめてからは、気が付けば、前へ行って、なるべくかんろだいの近くで参拝するようになっていました。

その理を受けてつとめる土地処の教会のおつとめです。現真柱様は、「よふぼくとしておつとめに関わるということは、よふぼくの試金石だ」とお聞かせ下さいます。

私達は、土地処の教会の名称の理に繋がり、ぢば一条に心を寄せて、日々、自らの誠の心を磨くおたすけの実動の中で、おさづけの取次の中で、ひのきしんの姿勢の中で、心のほこりが銘々払い清められて、悪しきいんねんが根絶されて心が澄み切り、運命が転換されて陽気ぐらしの境地へと確かな歩みを進められます。

皆、いんねんを一手一つに結んでおつとめを勤める中で、親神様の御守護を頂いて、自然を蘇らせ、社会を活性化させ、世の中を生き返らせる、そして、豊かな陽気ぐらしへと御守護を頂く。また、真剣におつとめをつとめることを通して、改めて、この世の人間存在の意味をしっかりと自らの心に再確認して、更に、一れつ兄弟の自覚も深めて、互いに助け合う陽気ぐらしの生き方をより確かなものとするのだと思います。

世の流れに竿刺そう

最初に申したように、今、世の中も道の上にも転機を求められています。

この世の中の流れの中に押し流されていく一人ひとりになるのか、或いは、それに竿刺して少しでも親神様・教祖のお望み下さる陽気ぐらし世界への立替を担う一人ひとりになるのか、その突き付けをされている時だと思います。

明治二十年、教祖が現身をお隠しになるとき、「神が怖いか律が怖いか」、「さあ、今というたら今、抜き差しならぬで、承知か」と仰せられたギリギリの状態を思い起こします。

大変な時代、大変な世の中です。その中で、よふぼくとして、そのままに流されず、しっかりと親神様・教祖の御心を胸に体して、何からでも、それに竿刺して神様の望まれる陽気ぐらし世界へ向けお役に立つ一人ひとりにならせてもらおうではありませんか。この実動の旬に、そこのところを心して通りたいものです。

《以上要約。文責：編集部》

よくをわすれてひのきしん
これがだいゝちこえとなる　（十一下り目４）

「放っておいたら、いんねんのしがらみに足を取られていく外はない
人生の歯車を逆回転させる、そのキーポイントが、私はひのきしん
だろうと思います。」　（永尾先生お話しより）

来年１１月２９日には、真柱様ご夫妻をお迎えして創立百十周年記念祭が執行されます。大教会では、今からそれに備えて、植木のせん定などのひのきしんが始まっています。

また、毎月、大教会月次祭の前々日、祭典準備の一環として、草引きや窓拭きなどを行なっております。

「いつ、どうして下さい」というお願いも行き届きませんので、心ある方が、気の付いたことをして頂ければ幸いです。

皆様方の、心よりのひのきしんをお願いいたします。

雅楽講習会

大教会雅楽部雅鶯会（谷内伸自楽長）では、九月二十二日から二十四日に亘る二泊三日、大教会に於て雅楽講習会を開催。講師として山﨑康夫（雨龍部属）連孝樹（玉島部属）浅井みちよ（津部属）の三人の先生を招いて、二十四人が熱心に受講しました。

開講式で大教会長様は「大教会では、おつとめ奉仕人に準じて奉仕人に辞令を渡している。奉仕人は責任を自覚してしっかりつとめてもらいたい。また部内全教会にも雅楽が入った祭儀式が念願です。そのために講習会で技術の向上を図り、次の人に伝授して頂きたい」とお話し下さいました。谷内楽長は「御指導下さる先生も言葉に表現できない技術があります。目と心を講師に集中して練習に励んで下さい」と激励。

練習会場を会議室、講堂、旧教祖殿記念建物を使用。管別に分かれ組まれた曲目を順次勉強しました。今回は特に祭典楽に使っていない難しい曲を選んである丈けに受講生が四苦八苦していたのが印象的でした。

また雅鶯会として新しい舞楽を取り入れようと、太食調・抜頭の勉強もしました。何かの機会にお披露目することになります。

雅楽を始めて日の浅い人達には習得するための厳しさを肌で感じて下さった事と思います。今迄になくハードなプログラムであった今回の講習会、それだけに判らなかった事が判った、できなかった事ができた、参加した者だけが味わった喜びだと思います。閉会にあたり楽長は「講師から習ったことは講師のものです。自分のものにするためには日々の精進しかありません」と締めくくり充実した三日間を閉じました。

たまたま最終日の朝、シドニーオリンピックで高橋尚子選手がマラソンで金メダルを獲りました。聞きますと〝世界一厳しい練習〟があったそうです。

雅楽講習会日程

9月22日	
14：00	開講式
14：30	春鶯囀・凱踏（壹越調）
	越殿楽（盤渉調）
17：30	夕食・夕つとめ
19：30	柳花苑（雙調）
	千秋楽（盤渉調）
21：00	終了
9月23日	
6：00	朝つとめ・朝食
8：00	拾翠楽（黄鐘調）
	越殿楽（黄鐘調）
	青海波（黄鐘調）
12：00	昼食
13：00	海青楽（黄鐘調）
	西王楽破（黄鐘調）
	千秋楽（黄鐘調）
18：30	夕つとめ・夕食
9月24日	
6：00	朝つとめ・朝食
8：00	舞楽「抜頭」
	長慶子　三度拍子
12：00	昼食
13：00	合奏
15：00	閉講式・解散

こかん様につづく会

九月二十三，二十四日、こかん様につづく会をさせて頂きました。運動会シーズンのこの時期に「一日だけでも」と、参加して下さる人もあり、目標人数三十人を越す大勢の方が参加して下さいました。

午後五時、夕食に始まり、七時から自己紹介をしたり、お楽しみ行事ではパネルシアターや委員手作りの紙芝居、宝さがしゲームなどで盛り上がりました。宝さがしといっても宝ではなくクイズが隠されており、しかも景品がもらえるというこ

ともあり、その姿はみんな少女時代に戻った時のようでした。

翌日、朝食後それぞれに分かれてひのきしんをさせて頂き、八時から支部長様のお話を頂きました。それぞれ年令・立場は違っても参加者全員にわかりやすくお話し下さり、時には、一人ひとりに質問されるなどして、みんなの気持ちや考えも取り入れながら、心のほこりの払い方、素直な心の大切さなど、お道を通らせて頂くことの喜びを教えて頂きました。

支部長様のお話を胸に、毎月例会でパンフレットを配らせて頂いている所を、今回は、こかん様の足跡を少しでも辿らせて頂くためにも「一軒でも戸別訪問を」を目標に歩かせて頂きました。終わってみると、一軒どころか何軒も訪問したり、道端で出会った人にも声をかけパンフレットを渡した人も少なくありませんでした。支部長様の言われた通り、「ありがとうございました。」ニコッ（笑）とすると、相手は笑顔でなくても、こちらの心はとてもすがすがしく気持ちのよいものでした。

そして会食です。今回は、婦人会の方々が全て準備して下さいました。運ばれてくる料理を目にしたみんなは料理のすごさに「ワォーッ」と言って、驚きと喜びに満ちあふれていました。唐揚げ、フライドポテト、フルーツ、そしてメインの手巻きずし。ネタも豪華で、その美味しさにつられて話もはずみました。心も胃袋も満たされ、最後のゲームでは連想ゲーム、女優なりきりゲーム、接続詞ゲームなどで大いに盛り上がり、中でも接続詞ゲームでは、（くさい）にをいがけ、となり、みんな大爆笑！ゲームに夢中になっている間に、婦人会の方々が片付けを全てして下さり本当に勿体なかったです。有難うございました。

閉会式後のアンケートでは、楽しかったという声が一番多く嬉しかったです。浪速布教に出られたこかん様、当時十七才ということから、高校生の参加が非常に少なかったので、今後の課題として取り組んでいきたいと思います。そして、十一月三日の笠岡女子青年大会へ、一人でも多くの方に参加して頂けるよう、委員みんなが一つになってつとめさせて頂きます。支部長様、婦人会の方々、参加者のみなさん、有難うございました。

主体のこかん様につづく会ですが、その高校生の参加が非常に少なかったので、今後の課題として取り組んでいきたいと思います。そして、十一月三日の笠岡女子青年大会へ、一人でも多くの方に参加して頂けるよう、委員みんなが一つになってつとめさせて頂きます。支部長様、婦人会の方々、参加者のみなさん、有難うございました。

Leader's Mini-Essay

心の通ひ路

障害に学ぶ

眞府分教会長　高田弘之

十年前の七月のある日のこと、手話講習会の講師をつとめていたとき、会場へ受講生の母親が来られ、「急用です」と言われ、その年四月に設立された重度知的障害者の作業所「大きなかぶ」の運営母体「ねずみの会」を作ったので会員になってほしいとのことで、受けさせて頂くと、いきなり会長になってほしいと言われて、作業所の場所もメンバーもわからないまゝ引き受けさせて頂き、私の勉強が始まりました。

「大きなかぶ」の現状を見て、府中市全体の実態をつかむべく、他のグループへ呼びかけ、組織作りに着手し、同年十一月「府中障害児者のくらしを守る会」を結成し、その会長にも推されて「大きなかぶ」は市の施設の一部屋を借りての活動であったので、作業所建設等の運動を進めて行きました。

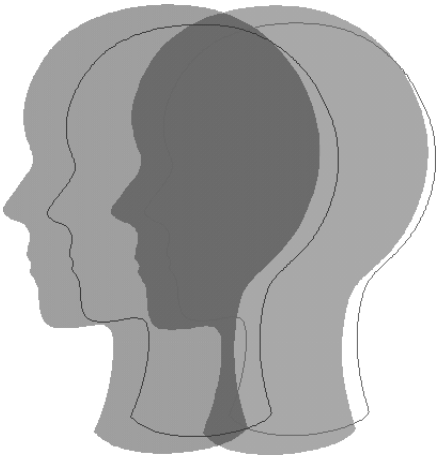
私自身はそれまで、手話を通して福祉活動を続けさせて頂いておりましたが、知的障害者の中で真剣に向き合っての生活は、わからないことばかりで、早口でしか話せない人にもっとゆっくり話

すように、と言っては〝修行が足りん〟と言われ、明るい人、そうでもない人との接し方にとまどいを覚えたり、失敗の連続でしたが、それでも三年後には一〇〇坪の土地に二〇坪の作業所が公費で落成しました。

会長としての私の役目は市役所へ行き、企業へ出向いて頭を下げることが多く、神様から〝低うなれく〟と教えて頂いているのだと思っております。「大きなかぶ」も「くらしを守る会」も今年十周年を迎え障害者団体として行政からも認められるようになり、次第に市民の皆様の理解も深まってきたように感じられます。

「大きなかぶ」の彼等、彼女たちは、私にとって、まるで心の洗濯機でありました。どんなに汚れた心も、澄んだ目で、百万ドルの笑顔で洗い流してもらっていたように思います。いつも神様が先まわりをして働いて下さっているように思えます。

二年前から私も身障手帳を頂き、昨秋身障協会に入会、今年度いきなり総務部長の大役を頂き、「障害は個性」という思い一杯に、喜び勇んで、一歩々々地に足つけて歩ませて頂きたい、と自らに言って聞かせている昨今でございます。



健康診断に思う

福実布教所長　酒井　實

先日、久し振りに健康診断を受ける機会が有りました。今年は、例年に無く猛暑が続き、夏バテからか、それとも、飲み過ぎによるものかは分かりませんが、再検査が必要との診断。胃と十二指腸に傷があるので、カメラを入れましょう、合せて、肺にも白い影が有るので、肺の断層写真も、とるようにとの事。肺の写真の方はともかく、胃カメラをのむのは大変苦しいと、人から聞いて居た事もあって、再検査をする気は無かったのだが、医者の再三の助言も有り、意を決しての初挑戦、飲んだのは良いが、辛いわ、苦しいわ、まあー、あんなもは、二度と食する?、ものでないとの実感。

教典第七章に〝人体のこの精巧な構造、微妙な機能は、両親の工夫で造られたものでもなければ、銘々の力で動かせるものでもない。すべては、親神様の妙なる思わくにより、又、その守護による〟と、かしもの・かりものについて、述べられてあります。

今回、写真、並びに、胃カメラを透して、自分自身の肺、更には、食道から胃、そして十二指腸と、僅かではあるが、この目で見医者の説明を聞いた時、人体の神秘と言うか、親神様からの、かりものであるとの思いを改めて痛感したのです。

我々は、日々何も考る事もなく、熱いものであろうが、又、冷たいもの、更には、スタミナラーメンのような、激辛のものまで、只、口を通して飲み込むだけ、後は、食道から大腸迄、不足も言わず只、もくくと、消化吸収をしてくれて居る訳であります。これは、自律神経の働きにより、全自動で行なわれて居るのである。

おふできに、「めいくのみのうちよりのかりものをしらずにいてハなにもわからん」とありますが、逆に言えば、かしもの・かりものの理が、真に治まれば総てが分かり、どんな中でも、成って来る理を喜び、身上事情を通して、親神様の思いを悟り、更に成人に向って、歩みを進める事が出来るのではないでしょうか。

この度の、チョットした印を通して、兎もすれば、惰性に流されやすい日々の通り方を、改めて見つめ直す、良い機会であったように思います。ちなみに、二個所からの生体組織検査の結果は、肺も胃腸も、大丈夫との事。

しかし、この原稿依頼が来てから　再び胃の調子が・・・・。

九月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます
親神天理王命の御前に 会長 上原理一慎しんで申し上げます
猛暑だった今年の夏も 九月の半ばを過ぎ さすがに朝夕めっきり涼しくなって 秋の気配を感じる頃となりました　親神様の子供かわいい親心からの妙なる御守護により夏には夏の 秋には秋の心の潤いをお与え頂きますことは 誠に有難く勿体ない極みでございます　又 なかなか雨が降らず 作物への影響を心配し 雨を願っていたところ 結構に雨を振らせて頂きましたことも有難く御礼の申し上げようもございません　只 所によっては 雨が降り過ぎて人身に被害が出 改めて 願い通りではなく 心通りの御守護の世界であることの認識を深め 他人事ではなく我が事として反省しつつ ご恩報じを願ってたすけ一条の上に勤め励ませて頂いております
その中にも今日の吉日は 九月の月次祭を執り行う日柄でございますので 今日の日を楽しみに寄り集いました理に繋がる道の子供達のお歌の唱和と相共に 只今から おつとめ奉仕者一同明るく陽気に勇んで 座りづとめてをどりをつとめさせて頂きます　皆の勇み心をご覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます
又 今月は にをいがけ強調の月とのお打しに添い 日頃の百万軒にをいがけに加え より一層の思いを強めて にをいがけに歩かせて頂いておりますし 月末の全教一斉にをいがけデーに於いて 今月の総仕上げをさせて頂く所存でございます　そして 又 たすけ一条の思いは 国内に留まらず 海外にも目を向け 海外伝道を志す者が一人でも多く出てくれる事を願って本日は 海外伝道講習会を開催させて頂きます　更には 又 十一月の百十周年決起の集いには 百万軒にをいがけ達成の報告が出来るよう 尚一層にをいがけに拍車をかけさせて頂く覚悟でございます
何卒 親神様には 諭達第一号に込められた布教活動の実動の思いに添いきる皆の真実の心をお受け取り下さいまして　万たすけの上に自由の御守護を賜り 一波わずかに動いて万波随うごとく 人々の心が澄み渡り お望み下さる陽気ぐらしの世の状に一日も早くお導き下さいますよう 一同と共に慎んでお願い申し上げます

ふたことみこと

先日、小学校からの同級生が、地元で初めてのコンサートを開くと言うので、妻と子供を連れて応援に行きました。　その同級生（女性）は、高校の時ヤマハのポップコーン孀恋本選会に中国地区代表で出場した経歴の持ち主で、ちなみにその時のグランプリにはあの中島みゆきの『時代』が輝いたのです。それ以後、結婚して広島市内で暮らしているとのことでたまに顔を見かける程度だったのですが、まさか歌を続けているとは思いませんでした。　一月程前に地元の同級生から「kチャンが地元で初ライブやることになったからみんなで応援に行こう」と声が掛かり、それじゃあ！と出かけました。　会場の一角はさながら同窓会のようで、受付でもらったパンフレットを少し目を離して細目で見ている自分達を笑い合いながら、懐かしい清流のような歌声を聞き、四十歳を過ぎてなお、夢を追い、挑戦し続ける彼女の姿に心からエールを送りました。　いくつになっても夢を持ち、前向きに歩んでいく姿には共感を憶えるものです。　さて、私も四十代、いつまでも夢失わず前向きに、歩み続けて生きたいものです。

秋季霊祭祭文

此の笠岡大教会の祖霊殿にお鎮まり下さいます　本席様の御霊　初代真柱様並びに奥様の御霊　二代真柱様の御霊　中山家ご先祖の御霊　大教会創設の祖　上原佐吉大人　八重刀自の御霊初代会長　上原さと刀自の御霊　二代会長　上原伊助大人　光刀自の御霊　三代会長　上原繁雄大人　くにゑ刀自の御霊　四代会長　上原郁雄大人の御霊　大教会草創の頃より長の年月歴代会長と共にご苦労下さいました　役員　部内教会長　教人　よふぼく　信者の御霊　諸々の御霊の前に　会長　上原理一　慎んで申し上げます

御霊様方には　親神様　教祖のお見定めとお引き寄せにより　早くから道の先達としてたすけ一条の上に邁進されました　しかも　決して楽々の道ではなく　むしろ険しい程でありました官憲圧迫や誹謗中傷　戦火の中　もちろん　自らの身上事情等の中をも　ひたすら親を信じ親に凭れて　生きの限り只一筋に通りきられました　今日の笠岡の結構な姿をお見せ頂いておりますのも　親神様　教祖の御守護お導きの賜である事は申すまでもございませんが　御霊様方の真実の伏せ込みがあったからこそと　朝夕に御礼申し上げておりますが　今日の日は　秋の霊祭りを執り行う日柄でございますので　在りし日に思いを馳せ　御遺徳を称え　御心をお慰め申し上げたいと　御前に海山草々の物を供え　縁ある人々相共に　おつとめ奉仕者一同　只今　親神様の御前にて　勇んでてをどりをつとめさせて頂きました　ここに　改めてご生前のご丹精に御礼申し上げます

さて　本年は　諭達実動の年としてお打ち出しを頂き　加えて創立百十周年に向かう二年目の年として　どうでも実動しようとの思いから　「つとめに専心」「百万軒にをいがけ」「全教会で陽気ぐらし講座開催」を申し合わせつとめさせて頂いております　お陰をもちまして　十一月の創立百十周年決起の集いには　てをどり総立ちまなびをさせて頂き　百万軒にをいがけ達成の報告をさせて頂く事が出来そうですし　陽気ぐらし講座も数ヶ所はまだ未定ですがほぼ開催する事が出来そうです　改めて　御霊様方のお力添えに御礼申し上げる次第でございます

何卒　御霊様方には　旬の声に一手一つに心を結び合って歩む皆の真実の状を御覧下さいまして　ますますの理の栄えと家々の弥栄えを御守護頂けますよう　お見守りお力添えの程を一同と共に慎んでお願い申し上げます

学生会別席団参

日　時　11月25日（土）～26日（日）

日　程
- 25日　午後　別席（午後席）
- 　　夜　お楽しみ行事（詰所）
- 26日　午前　月次祭参拝
- 　　正午　おぢば管内の学生との親睦会（詰所）

対　象　高校生・大学生

☆別席を運ばない人や親睦会(26日)のみの参加も歓迎します。

☆詳しいことは各ブロックの担当委員か吉岡(興明)までお尋ね下さい。

教会別人づくり一覧表（立教163年１月１日より 立教163年９月30日まで）

名称	初	授	修	講前	講後
笠岡	3	1			
福山	11	4			
髙屋	1		1		
神邊					
島根	2				
久松	1				
鶴山					
弥髙山	1				
陽備					
摩耶					
金浦	1		1		
興明	1				
ひろさと					
陶山	1				
芳井	3				1
呉照					
海松ヶ岡	14	2			
東悠					
吸江	1				
照陽					
輝美濃				1	
新山邑	1	1			
呰部					
明石市		1			
上下	2				
府中市	5				
東城	1				
服部		1			
島中					
驛家					
油木	2				
葦陽		1			
湯田原	1				
備中					
神昭					
美之郷					
錦備					
廣町					
福廣	1	3	1	1	
福勇					
福芦	1	3			
福満	3				
福岩					
西村					
福年					
引野	2	1			
福昭	1				
福春					

名称	初	授	修	講前	講後
福中					
福富士					
福東	1		1		
東福山					
福南					
福順					
福節		1			
福備					
福輝					
坪生					
八尋					
深安					
笠尋	1				
芦品	1	2			
安那					
芦田川	1				
三郡			1		
芦常			1		
芦辺					
芦加茂	2				
惠陽	19	2			
陽實					
御野					
香地華		2			
真金		1			
仲條					
稲倉	10	1	5	2	
稲瀬		2	1		1
稲富士					
稲讃	4				
門司港					
大惠山					
東水島	2	1	2		
高児島					
高児島					
出雲					
瑞雲					
海潮川					
錦洋	1				
米府					
弓ヶ濱	1				
西伯					
米美					
伯仙					
照雲					
輝伯					
松都					
樺島					
亀田山	2	1	1		

名称	初	授	修	講前	講後
出雲川津					
天場山					
簸ノ川					
多古浦	3		1		
瑞北					
雲東	2	1			
神村					
呉中					
大江橋	2	2			
品治	1		1		
久福			1		
久津				1	
呉福					
鶴南					
鶴眞		1			
川島郷					
鴨方					
作備		1			
輝華					
錦ヶ原	1				
行滕					
眞府	1				
吉舎					
清嶽					
上小畠		1			
木津和					
國須		3			
上吉野					
上備					
河佐	2				
上川邊					
甲井		1	1		
上父					
阿木行					
宇津戸					
河面	2				
府鮮					
府庄					
府世原	1				
神驛				1	
神免					
葦沼					
合計	120	41	19	6	2

第７１６期修養科募集要項

＊修養科期間
立教１６３年１２月１日～立教１６４年２月２７日

＊教　養　掛
３ヶ月間　谷　内　伸　自　（大教会役員・輝美濃分教会長）
１ヶ月目　原　　公　彦　（芦 常 分教会長）
２ヶ月目　渡　邉　孝　信　（神 驛 分教会長）
３ヶ月目　仙　田　喜久雄　（天場山分教会長）

＊募集要項
・志願者は、１２月末日現在で満１７歳以上で、下表の必要書類を携え、上級教会を経由して大教会に順序参拝すること。
・１１月２５日までに笠岡詰所に入所し、教養掛の面接を受けること。
・３ヶ月の修養期間を修了後は、大教会での修養科修了講習会を受講し、３月１日の昼食後に解散。

＊教　科　書（必須）
『おふでさき』、『みかぐらうた』、『天理教教典』、『稿本天理教教祖伝』、『よふぼく手帳』。

＊参　考　書（出来れば持参）
『おてふり概要』、『なりもの練習譜』（笛・打楽器または三曲）、『おやしき・史跡案内』。

＊携　行　品
おつとめの扇、筆記用具、認印、笛（男鳴物の講義で笛と小鼓の内、笛を選択する人のみ）。

＊服　　装
ハッピ及び帯・バンド、長ズボン（又は、それに類するもの）、靴。

書　　類	大教会	詰所	備　　考
「順序参拝票」	○	○	
別　席　願」	○	○	・「初席願」の順序参拝がまだの者で、修養科入学後に初席を運ぶ者のみ。 ・願書に日付を入れない事。 ・おさづけの理拝戴願の順序参拝も合せて行なう。 ・「別席の誓いの言葉」は別席の誓いの日までに覚えること。
「席　　札」		○	
「別席のしおり」	○	○	
大教会　御供	○		
本　部　御供		○	
「おさづけの理拝戴願」	○	○	・「おさづけの理拝戴願」の順序参拝がまだの者で、修養科入学後におさづけの理を拝戴する者のみ。 ・願書に日付を入れない事。
「おはなし」	○		
大教会　御供	○		
本　部　御供		○	
「修養科入学願」		○	・御供は任意であるが、慣例により、２００円以上。
「修養科入学事由書」		○	
修養科入学御供	○		
「住民票」または「戸籍抄本」		○	・「戸籍記載事項証明書」、「身分証明書」でもよい。